

# 『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (17)

ロザマンド・ラングブリッジ

芦澤久江

## 1. はじめに

20世紀以降、文学において心理学的アプローチを試みる研究が盛んになった。19世紀末から20世紀にかけて、フロイト (Sigmund Freud) やユング (Carl Gustav Jung) のような人間の無意識の部分に着目する心理学者が登場したからである。19世紀の小説はプロットや登場人物の性格が重視されたが、20世紀初頭になると、心理学の影響を受け、これまでの小説の概念を覆し、プロットや登場人物の造形に腐心するのではなく、「意識の流れ」を小説に取り入れる作家が現れた。ロレンス (D.H. Lawrence)、ウルフ (Virginia Woolf)、ジョイス (James Joyce) らはその代表的な作家であり、「意識の流れ」を克明に追う実験的小説を描いた。また小説に限らず、文学研究においても無意識の層を掘り下げることによって、作家が意識していなかった深層心理に目を向け、新たな視点を提供する傾向が見られるようになった。ブロンテ研究もその例にもれず、20世紀初頭から、心理学的視点でブロンテ作品を研究する流れが生じている。特にシャーロットの生涯を考察するうえで、彼女の潜在意識を研究することは非常に重要であると見做された。なぜなら、ギaskell (Elizabeth C. Gaskell) によってシャーロット (Charlotte Brontë) は神格化され、一面的なシャーロット像が長い間支配してきたからである。シャーロットの無意識の部分に焦点を当てて考察することは、シャーロット像を再構築し、立体化することに通じるであろうと思われる。そこで小論では、20世紀初頭に心理学的研究を試みたロザマンド・ラングブリッジ (Rosamund Langbridge) の主張について考察してみたいと思う。

## 2. 抑圧された自己

ラングブリッジはシャーロットの生涯について述べる時、シャーロットの手紙以外、すべてはギaskellの伝記に依拠している。しかしラングブリッジは伝記を細かく把握しておらず、シャーロットは38歳で亡くなったにもかかわらず、「40歳で亡くなった」(2) という誤った記述をしている。その点でラングブリッジの研究態度にはいささか疑問は残るが、心理学的研究を早くから行なったという点では注目に値する。

ラングブリッジはシャーロットの生涯が陰惨な不幸の連続で、シャーロットには忍耐と自己犠牲が必要だったと述べている(3)。さらに、ラングブリッジによれば、自己犠牲には二種類あり、慎重に熟考してから自己犠牲を行う場合と、強制的にそうせざるを得ない場合がある(3)。シャー

ロットの場合は自己犠牲を自分から選んだのではなく、必要に迫られてしたことであり、シャーロットにその自己犠牲を強いたのは、父親のパトリック (Patrick Brontë) であった (Langbridge 5)。まずカウアン・ブリッジに子どもたちを入れていなければ、マライア (Maria Brontë) もエリザベス (Elizabeth Brontë) も命が助かったであろうし、シャーロットはふさわしい男性を引き付け、エミリ (Emily Brontë) もまたもっと多くの作品を書いたであろうし、生まれながらの牧師の妻にふさわしいアン (Anne Brontë) は司祭館をとりまとめていたであろう (Langbridge 6)。またブランウェル (Branwell Brontë) に至ってはブラック・ブルに通うこともなかったとラングブリッジは述べている (6)。しかしこの主張には何の根拠も与えられていない。カウアン・ブリッジでの体験はシャーロット、エミリにとって悲惨なものだったかもしれないが、パトリックがその学校を選んだことがすべての悲劇の源だとするのは間違いである。

さらにラングブリッジはパトリックを非難し、パトリックはカルヴァンの影響を受け、子どもたちを教育しただけでなく、もともと子どもが嫌いだったと述べている (7)。その証拠として、ラングブリッジはギヤスケルに書かれているパトリックの言及を挙げている。パトリックは妻が矢継ぎ早に子どもを生んだので、そのことでみんなに恨み言をいっているとギヤスケルが述べているので、それを証拠としてラングブリッジはパトリックが子どもを嫌いだったと結論づけている (7)。だが、パトリックがどこでそのようなことを言ったかは確かではない。したがってこのことだけでパトリックが子どもたちを好きではなかったと判断することはできないであろう。ところがラングブリッジはこの主張をより乱暴に進めて、パトリックが子どもたちを「ペスト」や「厄介者」と考えていたとしている (7)。パトリックが子どもたちを「ペスト」や「厄介者」だと思っていたというこの発言はあまりにも極端である。ラングブリッジのパトリック非難はこれには留まらない。子どもたちが部屋で遊ぶことはパトリックにとっては罪であり、その結果子ども部屋に人形一つもない (8)。またギヤスケルが述べたパトリックの理解しがたい行動、妻の絹のガウンを引き裂いたとか、ブロンテの子どもたちのカラーブーツを火にくべてしまったというエピソード (88-89) をラングブリッジは再び取り上げている (15-16)。子どもたちは牧師の子どもたちとして声を上げて泣くことは許されず、涙を押し殺したというのである (Langbridge 17)。そしてこの出来事がシャーロットの運命の象徴となったとラングブリッジは強調している (18)。すなわちシャーロットは自分が愛するものを奪われても、それに耐え自分を押し殺すしかなかったというのである。

ギヤスケルの伝記に描かれたパトリックの奇癖について、ラングブリッジはそれが真実かどうか検証していない。現代においてギヤスケルがわざわざパトリックの奇癖に言及したのは理由があったことは知られている。シャーロットの特異な性格は奇妙な父親に育てられたからだとして、父親を悪者にすることでシャーロットを弁護する意図があった。したがって、その後の伝記において、パトリック像は修正されてきた (Shorter 53)。ところがラングブリッジはギヤスケルと同様に、シャーロットのトラウマとしてこのエピソードを掲げている。ギヤスケルの伝記が出版された直後には、ギヤスケルが描いたパトリック像を踏襲する伝記作家も多かった。しかし20世紀に入って、さまざまな批評家がパトリックを研究し、彼の知られざる面を明らかにしてきた。それにもかかわ

らず、ラングブリッジは他の伝記作家については言及もせず、ギヤスケルの主張をそのまま踏襲する点には疑問を感じざるを得ない。たとえギヤスケルの意見を支持するとしても、その他の伝記作家の意見をどのように考えるのか、またラングブリッジの主張する根拠がどこにあるのか明らかにしなければならない。ところがラングブリッジはそのようなことをしていない。それゆえ彼女の批評は印象批評であり、ギヤスケルにただ同調しているだけとしか言えないのである。

前述したように、シャーロットにとって精神的に重要だった時代はカウアン・ブリッジだったとラングブリッジは述べている (19)。カウアン・ブリッジでブロンテ姉妹は忍耐を余儀なくされた。そのうえ二人の姉が亡くなった。もともとブロンテの子ども部屋からは墓地が見え、死をつねに目の当たりにしていた。死を見つめながらも淡々と暮らす生活は、死に対する恐怖を感じながらもそれを押し殺しているだけで、死を克服したわけではなかったであろう。ラングブリッジは、ブロンテの子どもたちの頭からは死と地獄への恐怖が離れなかったと述べている (27)。またこのように本能を抑えることほど健康に害を及ぼすことはなく、肉体的活力を消耗させ、精神的エネルギーを損なうものであるとラングブリッジは分析している (28)。ブランウェルは行儀が悪く、本能のまま生きていたが、他のブロンテの子どもたちはそうすることができなかった。父親が本能的な欲求は罪だと見なしていたことを彼女たちは知っていたので (29)、彼女たちはブランウェルのように本能のまま振る舞うことができなかったのである。姉妹にはそうした緊張を発散するはけ口がなく、抑圧されたシャーロットはうわべではとりすますようになってしまったのである (Langbridge 30)。

ラングブリッジが述べているように、カウアン・ブリッジの出来事はシャーロットにとって精神的に大きな影響を及ぼしたに違いない。『ジェイン・エア』のなかで描写されているように、つねに不足していた食べ物、質素な服装、寒い冬の日曜礼拝など (92-93)、ラングブリッジも述べているように、忍耐の毎日だった (26)。そのうえ姉二人が続けて亡くなってしまったのだ。そして何よりも重要なことは心が抑圧されていたことである。ラングブリッジが指摘しているように、死の恐怖はシャーロットにつねにつきまとい、その恐怖を言葉にすることはできなかったように思われる。ただラングブリッジはシャーロットたちには何の希望もなかったと述べているが (30)、姉妹は「グラス・タウン」や「アングリア」などの創作によって楽しみを見出していたので、希望がまったくなかったわけではない。彼女たちの幼いころの創作についてラングブリッジが何も言及していないのは理解しがたい。創作活動はそうした抑圧から解放される唯一の捌け口だった。それゆえ、カウアン・ブリッジの体験はシャーロットに精神面で大きな影響を与えたが、一方で創作がその悲しみを乗り越える支えになっていたのである。

### 3. 家庭教師とブリュッセル

シャーロットは家庭教師をすることになったが、ギヤスケルが述べているように、シャーロットは子どもが嫌いだった (184)。それは彼女が幸せな子ども時代を過ごしてこなかったからである (Langbridge 31)。シャーロットは子どもとはどのようなものであるかを理解できず、本能のまま

動き回る子どもは下品に見えたと言ブリッジは推測している (33)。

しかしシャーロットは教えることが成功への鍵だと信じ、家庭教師を試みたものの (Langbridge 34)、彼女の性質には合なかった (Langbridge 36)。シャーロットは自己主張できないだけでなく、容姿に対するコンプレックスも持っていた。したがってシャーロットのように自分が魅力的でないと思っている女性は人々からも魅力的だとは思われないのである (Langbridge 38)。

シャーロットはシジウィック家とホワイト家の家庭教師をしたが、いずれもつらい経験であった。給料は安く、山のような仕事のうえに、女主人からはほとんど無視をされ、それでもカウアン・ブリッジのときのように忍耐をしなければならなかった。したがって家庭教師の経験はシャーロットにプライドを失わせ、希望がないということを認識させるだけであったのである (Langbridge 63)。

次にブリュッセルについてラングブリッジの主張を見てみよう。当時ブリュッセルでのエジェ氏へのシャーロットの想いは批評家によって考え方が分かれていた。単なる教師と先生の関係だったとする批評家もいれば、明らかにシャーロットが恋をしていたと考える批評家もいる。シャーロットのエジェ氏への想いは恋愛感情ではないと考える人々はシャーロットを聖女と見なしているからだとラングブリッジは述べている (65)。ラングブリッジはシャーロットのエジェ氏への想いは確かに恋愛感情であり、それをシャーロットは隠したつもりだが、隠しきれていないという (67)。ラングブリッジによれば、第一の証拠として、シャーロットがエジェ氏に返事をくださいと懇願する手紙を書いたことが挙げられ (67-68)、またエジェ家の子どもは両親の態度や自分たち自身の推測から、シャーロットがエジェ氏に夢中だったと信じていたということが第二の証拠であるという (68)。さらに第三の証拠として、シャーロットがふたたび、ブリュッセルに戻ったとき、シャーロットはエレンに宛てた手紙において「良心に背き」「抑えられない衝動」に駆られた自分を責め、「自己中心的な愚かな行動」のために「罰せられた」と告白していることが挙げられ (Langbridge 68)、第四、第五の証拠はシャーロットの小説のなかにあるとしている。シャーロットは小説でエジェ氏を思わせる恋人を登場させ、実際には結婚できなかったが、小説のなかでは恋愛を成就させ、一方エジェ夫人を意地悪い人間として描いた (68-69)。第六の証拠は、マラム・デンプルビー (John Malham-Demblby) がシャーロットとエジェ氏はお互いに思っていたと述べたこと、第七の証拠は『ヴィレット』をフランス語に訳すのをシャーロットが反対したことである (68)。そして最後にシャーロットが恋に破れ、ブリュッセルから戻ってきたときハワースの人々でさえシャーロットの変化に気づき、ブリュッセルに恋人がいると噂されていたことを証拠として挙げている (Langbridge 70-71)。

ギヤスケルがどれだけシャーロットの想いをひた隠しにしようとも、また批評家たちがシャーロットの聖女伝説を守ろうとしてエジェ氏への想いは恋愛感情ではなかったと主張したとしても、現代において、シャーロットがエジェ氏に恋をしていたことは明らかであり、それを否定する人はいないであろう。しかしラングブリッジの時代においては、まだそのことは論争の的となる重要な問題だったようである。しかしラングブリッジはマラム・デンプルビーが述べたシャーロットとエジェ氏

はお互いに好きであったという説 (129) には同意していない (73)。エジェ氏が夫人を裏切っていたという証拠は何もなく (Langbridge 74)、ただシャーロットを聖女として崇める人々にとっては、彼らがお互いに愛し合っていたと考えるほうが都合がよかったのである (Langbridge 74)。

興味深いことにラングブリッジはシャーロットが幸せな結婚はできないタイプであるという説を展開している (78)。幸せな恋愛をするには、陽気で向こう見ずでな精神をもっているほうが良く、ブロンテのように誠実すぎると恋愛の芽を摘んでしまうことになる (Langbridge 79)。しかしなぜシャーロットはエジェ氏に惹かれたのか。フロイト的に考えれば、父親パトリックと弟ブランウェルが異性の原型であり、その二人にエジェ氏は似ていたからである (Langbridge 82)。したがってシャーロットの小説に登場する男性はパトリックとブランウェルの混合であり、ロチェスターはブランウェルであり、セント・ジョンはパトリックである (82-83)。つまりシャーロットがエジェ氏に惹かれたのは、父親に似ているからでもあるが、ブランウェルにも似ていたからだと言えよう (95)。

またシャーロットとエジェ氏の顔には共通点がある。眼は嘲り、ユーモア、敬虔さを表し、二人の顔は恐れを知らない支配的な性格を表し、それが時として暴君にもなりうる点が共通している (Langbridge 95-96)。こうした共通点はラングランドが二人の肖像画から判断したものであるが、顔の表情から性格を読み取る骨相学は19世紀に流行した似非科学であり、信頼することはできない。しかしエジェ氏とシャーロットには確かに共通点はあったかもしれない。ロチェスターやポールに見られるように、粗野で愛想のない性格はシャーロットも同じだった。それゆえシャーロットはエジェ氏に惹かれたのであろう。

前述したようにシャーロットは自分が不器量であることを知っており、人生は義務であり、美ではないと考えていたし、喜びや愛は自分のためのものではなく、他の人々のためにあると思っていた (Langbridge 89)。またシャーロットには幾分無情な面があると感じる人もいるが、それはシャーロットの劣等感からくるものではなく自分の弱さを隠すためから生じるものであった (Langbridge 94)。弱さを強調して人から同情されることもできたが、シャーロットはそうはしなかった。シャーロットは気に入られようとはしなかったし、そうすることができるとは思ってはいなかったのである (94)。

シャーロットはつねに正しいことをすることが大事だと考えていたので、喜びというものを知らなかった。それにもかかわらずエジェ氏への想いはもう抑えることができなかった (Langbridge 110)。シャーロットは大げさに考える癖があり、ブリュッセルの女子生徒、エジェ夫人などの敵対意識も実際より強く感じたため、エジェ氏の存在が一層救いとなっていた (Langbridge 111-12)。しかしエジェ氏の態度が冷たくなり、シャーロットの自信は絶望に変わり、やがては病的な鬱になっていく (Langbridge 120-21)。ついにはシャーロットは不眠症となり、これをきっかけにその後もたびたび不眠症に悩まされるのである。その結果、シャーロットはハワースに帰ることになるが、それでもまだエジェ氏のことを思い続け、手紙を書く。だが手紙の返事は一切なく、ブリュッセルと自分自身の間に大きな深い空間ができ、それを埋めるものは何もなかったのである

(Langbridge 150)。

#### 4. 宗教

エジェ氏をあきらめても、もう一人愛すべき人がシャーロットにはいたとラングブリッジは述べている (152)。それは神である。シャーロットにとっては愛が人生のなかで至上のものだった (Langbridge 152)。シャーロットは恋人として暴君を好むタイプの女性で (Langbridge 152)、そのため厳しい試練のもと彼女は神の愛を得ようとしていたのである。彼女が信仰していた宗教は福音派のプロテスタントであったが、その教えの根底になっていたのは恐れであった。すなわち、美への恐怖、批判あるいは比較の恐怖、自発性の恐怖、自己表現の恐怖だった (Langbridge 158)。したがって彼女の生涯と性格を恐怖が支配し、その結果恐怖のために健康を害し、彼女の魅力も損なってしまったとラングブリッジは主張している (158)。そして恐怖はシャーロットの生涯や性格だけでなく、作品にも表れている (Langbridge 158)。ラングブリッジによれば『ジェイン・エア』に登場する狂った妻はエジェ夫人への病的なまでの恐怖と彼女への嫉妬が表されている (159)。ロンテたちが眠ったと思うと、夫人は彼女たちの身の回りの物を見たり、服のポケットまで見たりしていた。すなわちスパイをされているという恐怖がシャーロットの頭から離れず、それはついに狂った妻バーサを創造することになった。『ジェイン・エア』のなかでバーサもジェインの部屋にやって来て、ウェディングドレスを引き裂いている (312)。シャーロットがストレスに悩まされていた時に見た夢はシャーロットの死を予言させるものであった (Langbridge 159)。夢のなかでシャーロットは小さな泣く子どもを抱え、その子どもを何とかしたくてもどうにもならず、彼女の腕は疲れきっている。これはシャーロットの内的なものを映し出しており、過度の緊張によるものだとラングブリッジは述べている (160)。その夢に出てくる子どもの意味はエジェ氏の子どもがほしいというシャーロットの願望かもしれないし、結婚して子どもができると彼女は死んでしまうというお告げのようなものだったかもしれないとラングブリッジは推測している (160)。これは何とも言い難いことだとラングブリッジはしているが、推測だとしてもあまりにも独断的な解釈のように思われる。

これまでラングブリッジが述べてきたように、シャーロットのなかには確かに何かに怯える恐怖心がつねに存在していたと思われる。『ジェイン・エア』において、遠くの山並みを見ながらジェインが男女平等を訴える場面があるが、その直後に狂った妻バーサの笑い声で現実に引き戻されている (141)。ここではジェインはその笑い声の主がバーサとは知らないのであるが、つねに得体の知れないものに憑りつかれているという漠然とした恐怖を感じている。このジェインの心境はシャーロット自身であると言えるであろう。それでは得体の知れない恐怖とは何だったのか。シャーロットの幼少期に心に残って離れなかったのは死への恐怖だったと思われる。母親の死、そして何よりもマライア、エリザベスの突然の死はシャーロットの心に深く刻まれた。突然の姉たちの死を受け止めることはいかに悲しいものであったかということを考えれば、死への恐怖がつねにシャーロッ

トにつきまわっていたと考えられる。たとえそのような経験がなくても私たちは誰も死への恐怖を感じている。日常生活に紛れ忘れていただけだが、無意識の領域ではつねにそうした恐怖感を抱えているのである。

しかしラングブリッジは恐怖を植えつけていたのはそれだけではなく、カルヴァンの教えだったとしている (173)。シャーロットが亡くなる時に言った言葉を取り上げて、ラングブリッジは独自の解釈をしている (173)。シャーロットは亡くなる時、「神様は私たちが離れ離れにしたりしないわよね。だってこんなに幸せだったんですから」(Gaskell 524) と言ったとされている。その言葉は、シャーロットが妊娠初期の時に散歩し雨に濡れ、重大局面になってしまったことで夫のアーサーの責任であることを暗示しているのではない。結婚を反対して延期させた父親のパトリックの責任を問うのではなく、ましてや体力が回復するまで妊娠を先延ばしにしなかったことで自分自身を責めていたのではない。シャーロットが最も責任があると考えていたのはカルヴァンの神であるとラングブリッジはシャーロットの最期の言葉から推察している (173)。しかしラングブリッジはカルヴァンの神とシャーロットの最期の言葉がどのように関係しているのかこれ以上詳しく述べていないので、ラングブリッジのこの主張は不明確である。

## 5. 結婚

ラングブリッジは性格が健康に及ぼす影響という観点からシャーロットについて述べている。ブロンテ家の人々は医者嫌い、それは医者に診てもらうのが怖いという理由ではなく、医者を用いていなかったからだ。特にエミリは息も絶え絶えになっても医者に診せることを拒否していた。したがってブロンテの健康状態がどのようなものであったか知ることは難しい (Langbridge 176)。

ラングブリッジは、村人が述べているように、シャーロットは決して重い病気ではなかったと推測している (180)。シャーロットはつねに健康上の問題を訴えていたが、本当の問題は体ではなく、精神の病であり鬱病的な兆候であると主張する (181)。しかし肉体的にまったく問題がなかったわけではなかった。例えば頭痛と目のトラブルは肉体上の問題であった。この二つの原因は小さな字を書いたり、細かい針仕事をしたり、絵を細部にわたって描くことから起きているものだった。ここでラングブリッジは興味深い指摘をしている。食が細いということも眼に影響しているというのである (183)。シャーロットは食欲があまりないというのはカウアン・ブリッジで飢餓状態だったからであり、その後家に戻っても栄養に十分注意がなされていなかった。そうした不健康な状態は他のどの器官よりも眼に一番影響を与えるとラングブリッジは強調している (183)。果たしてそれは真実なのであろうか。現代の医学で実際どうなのか専門家でも意見が分かれるところかもしれないが、その問題は別としてシャーロットがカウアン・ブリッジでほぼ飢餓状態だったことは『ジェイン・エア』などの記述から確かなことである。ラングブリッジによれば、飢餓状態はあらゆる感覚、器官の極端な興奮を引き起こすという (184)。

こうした肉体的な健康上の問題があったのは事実だが、結局シャーロットの場合は恐怖から来る

精神上の問題が身体に表れているということである (Langbridge 185)。その恐怖とは死、失敗、不運、極端な自意識の恐怖であり、言い換えれば自己への恐怖だった (Langbridge 185)。もともとシャーロットは激しい反抗精神の持ち主だけれども、一方で司祭の娘であったため、つねに良きお手本でなければならなかった。こうした抑圧が、活力を奪い神経を圧迫しシャーロットを鬱にさせていたのである (Langbridge 186)。ラングブリッジの指摘はまさに的を射ていると思われる。シャーロットが身体的にあまり丈夫でなかったということは明らかであるが、繰り返す頭痛や不眠は身体だけでなく神経の問題だった可能性はある。虚弱な体に精神の病がさらに追い打ちをかけていたのであろう。

シャーロットはこうした状態だったので、結婚はすべきではなかったとラングブリッジは主張している (188)。もしシャーロットが若くして結婚していたら、彼女の健康状態は違ったものになっていたであろうとラングブリッジは指摘している (188)。

シャーロットの結婚はギヤスケルが描いているように幸せなものではなかった。なぜならニコルズは実際にはシャーロットの趣味ではなかったからだと言っている (216)。シャーロットの理想の夫は知的あるいはすぐれた人であり、ニコルズのような才能にも恵まれない凡庸な人ではなかった。ニコルズがハウスの助任司祭として着任したとき、シャーロットはミセス・ランド宛ての手紙 (1845年5月26日付) のなかで次のように述べている。

Papa has got a new curate lately, a Mr. Nicholls from Ireland—he did duty for the first time on <Thurs> Sunday—he appears respectable young man, reads well, and I hope will give satisfaction. (Smith I : 393)

この手紙でニコルズのことを悪くは言っていないけれども、それは今後年老いた父親の助けになってほしいという願望があったからであろう。ラングブリッジもシャーロットが個人的にニコルズに惹かれたのではないと考えている (204)。ところがそれから2年後シャーロットはエレン宛の手紙 (1847年10月15日付) のなかで、ニコルズを辛辣に批判している。

Mr. Nicholls is not yet returned just the same—I cannot for my life see those interesting germs of goodness in him you discovered, his narrowness of mind always strike me chiefly—I fear he is indebted to your imagination for his hidden treasure. (Smith I : 551)

シャーロットはニコルズが着任して2年経っても、彼の良さを発見できずにいたことがこの手紙を通してわかる。しかしニコルズは長い間根気強くシャーロットが自分の愛に答えてくれるのを待っていた。そしてプロポーズのときに、ニコルズが見せた女性でもしないようなすすり泣きを見て、心を打たれたのである (Langbridge 216)。

シャーロットが結婚するまでの心の変化を追っていくことは非常に興味深い。特に心理学的考察に適したテーマであろう。だがラングブリッジの分析は十分とはいえない。なぜならシャーロットがプロポーズを受けるまでの間、家族に悲劇が起きていたことを考慮していないからである。シャーロットの心の変化にもっとも影響を及ぼしたのは、ブランウェル、エミリ、アンの死だったにちがいない。それまではきょうだい心の支えだったが、一年も経たないうちにきょうだい三人を亡くしてしまったということは、どれだけシャーロットに深い悲しみを与えたか考える必要がある。作家としてはすでに有名になってはいたが、きょうだいを失い年老いていく父親を抱え、シャーロットは将来に不安を感じていたに違いないのである。

## 6. おわりに

これまで見てきたようにラングブリッジは、シャーロットの悲劇的な生涯は抑圧されていたことに起因すると考えている。まず、父親パトリックは華美なものを嫌い、子どもたちが本能のままに遊ぶことを許さなかった。その結果、シャーロットは自由を奪われ、自己を押し殺して、人生は義務が第一と考えるようになった。そのうえ、カウアン・ブリッジで忍耐を強いられただけでなく、姉二人を失った。死に対する恐怖はシャーロットの人生に暗い影を落とし、明るい未来を見通すことができなかった。またシャーロットは自分が不美人であることを自覚し、男性の気を引くことはできないこともわかってはいたが、エジェ氏への恋心は抑えることはできなかった。シャーロットが初めて本能をむき出しにして、自己を解放した瞬間だったかもしれない。ところがこの恋は報われぬものであり、その結果、彼女の自意識は絶望に変わった。最終的にニコルズと結婚するが、これはシャーロットの自己が本能のままに行動した結果ではない。ニコルズとの結婚は人生に絶望したシャーロットの妥協であり、唯一の慰めでもあった。ラングブリッジが指摘しているように、シャーロットは自己を抑圧したために、たびたび自己欺瞞をせざるを得なかった (30)。シャーロットの最大の自己欺瞞はニコルズとの結婚だったと私は思うが、ラングブリッジに指摘しているようにギヤスケルを初めとする伝記作家は、シャーロットの結婚が幸せだったとする傾向にある (Langbridge 199)。この点においてラングブリッジはシャーロットの深層心理を深く掘り下げるべきだったと思う。

また顕著な特徴はラングブリッジのパトリックへの辛辣な批判である。そこにはパトリックへの個人的な敵意さえ感じられる。証拠を検証したわけでもないにもかかわらず、パトリックの奇癖を取り上げて、ブロンテの子どもたちの悲劇の始まりとする主張は明らかに独断的偏見としか言えない。また引用文献の明記もなく、シャーロットの亡くなった日、手紙の日付を間違えて引用するなど、研究者としての態度に疑問が残る。さらに心理学的研究と題しながらも、これまでの伝記作者の視点と大きく変わっているところはなく、抑圧された自己に着目しながらも深い考察はなされていない。したがって、ラングランドが心理学的アプローチを初めて試みたという点では注目すべきであるが、分析力に関しては不足していると言わざるを得ないのである。

引用文献

Brontë, Charlotte. *The Letters of Charlotte Brontë*, edited by Margaret Smith. Oxford: Clarendon Press, 1995. 3 vols.

----- . *Jane Eyre*, edited by Q.D. Leavis. Penguin Books, rep.1986.

Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Brontë*, edited by Alan Shelston. Penguin Books,rep.1975.

Langbridge, Rosamond. *Charlotte Brontë : A Psychological Study*. London: William Heinemann Limited, 1929.

Malham-Dembleby, John. *The Key to the Brontë Works*. London and Felling-on Cyne: The Walter Scott Publishing Co. Ltd. 1911.

Shorter, K. Clement. *Charlotte Brontë and Her Circle*. New York: Dodd, Mead and Company, 1896.